

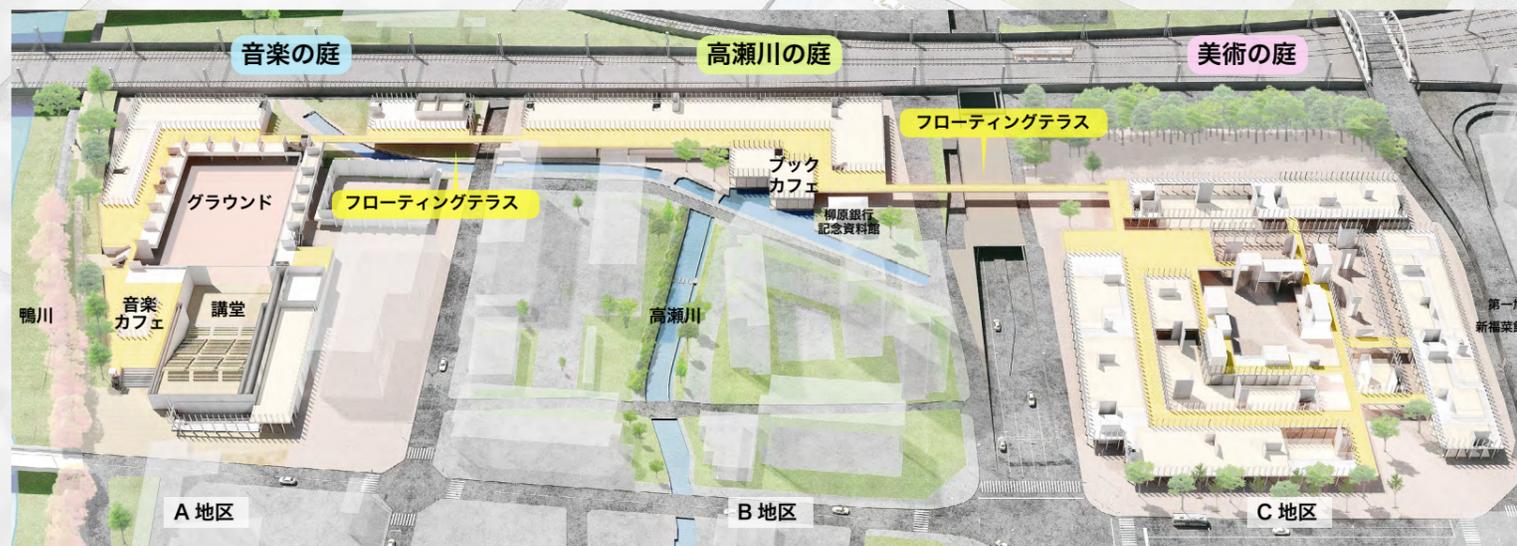
京都芸大を中心にした新たな町づくり

観光地にしよう!

京都には年間約 5600 万人もの観光客が訪れる。京都の町の魅力はお見世である。お見世は京都に住む人びとの日常生活の中心である。そのお見世で、京都の人びとの生活に触れ、そこにしかないお土産を求め、そこにしかない美食を味わうことができる。観光地京都はそこに住む人びとの日常生活と共にある。それが京都の町の最大の魅力である。

京都芸大に固有のお見世をつくる。京都の新たな観光地にする。新たな名所にする。京都芸大に外から多くの人びとが訪れることによって周辺に住む人びともまた刺激される。大学、京都市そして周辺住民自らの手によって、京都芸大を中心にした新たな町づくりが始まる。

大学の基本構成



3つの庭  
芸術活動の中心

+

お見世  
まちに開く

+

フローティングテラス  
3つの庭をつなぐ自由通路

美術の庭

# お見世

美術の庭は、ガラスとルーバーの屋根で覆われた半屋外空間である。美術の庭にはいくつものお見世が顔を出している。ここに来れば今の京都の最先端の芸術を堪能できる。



■お見世は、見られる場所・聞かれる場所である

京都芸大には **お見世** がある。  
**お見世** は観光客が訪れる場所である。  
**お見世** は学生たちが自主的に運営する場所である。  
**お見世** は **美術の庭** 及び **音楽の庭** そして **フローティングテラス** に点在している。  
**お見世** は作品をつくる場所である。そしてそれを展示する場所である。  
**お見世** は作品を販売する場所である。「おみやげ屋」である。  
**お見世** は優れた作家・音楽家 (artist) を発見する場所である。  
**お見世** でコンサートをする。  
**音楽の庭** に面する練習室はお客様に音楽演奏を提供する **お見世** である。  
**お見世** は見られる場所であり、聞かれる場所である。  
**お見世** は作品、演奏が批評される場所である。

■お見世は、自分自身を演出する場所

学生：**お見世** で作品を見せる・売る  
 ミニライブを開催する、創作プロセスを見せる

油画専攻→絵画	彫刻専攻→アクセサリ
陶芸専攻→食器	作曲専攻→ミニコンサート
染織専攻→衣服	音楽と美術の協働→映像作品
漆工専攻→うつわ	学長による辻説法

観光客：見る、買う、音楽を聞く

ギャラリーで気に入った絵を買う、学生作品の陶器で御茶を体験する、カフェで現代音楽を聞く

自主的な創作活動や外部との連携プロジェクト企画など大学の枠を超えた活動を外部へ発信できる

▼

作品や演奏を見られる・聞かれることで技術や経験を培う

▼

多くの人を訪れることで地域一帯が活性化される

■お見世は、京都の日常生活の中心

**お見世** が日常生活と共にある、それが京都の町の魅力である。

**お見世** が連なる京都のまち

**お見世** の活動が表れる大学の庭

音楽の庭

庭



入学式、卒業式など多くの人が集まる記念式典、あるいは音楽の庭それ自体をステージに見立てるような大掛かりなオペラ



昇降式防音扉を下ろせば、講堂は一般的なコンサートホールである。音楽の庭には即興的な演奏を期待して観光客が訪れる

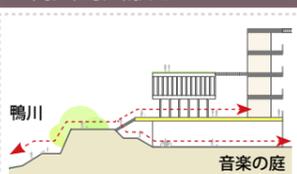
- ・講堂、練習室、各種合奏室等、全ての演奏室が **音楽の庭** に面している。つまり **音楽の庭** と一体的に利用することができる。
- ・講堂バックステージの壁は、その使い方によって、**音楽の庭** に対して開放することもできるし、昇降式防音扉によって閉じることもできる。あるいはガラス扉によって閉じることができる。
- ・**音楽の庭** に面した練習室や合奏室は、時には観光客や市民に対する **お見世** である。つまり公開の演奏室になる。
- ・**音楽の庭** は 1800㎡のグラウンドも兼ねている。崇仁地区のお祭りや盆踊りの等、地域のイベントにも利用される。
- ・**音楽の庭** は災害時には地域の避難所になる。
- ・**音楽の庭** 周辺は五階建ての練習室によって囲われ、更に上空を大きな庇で覆われているため、音響効果の制御に適しているだけでなく、市営住宅側を含めて近隣の人たちに対する騒音災害を十分に防ぐことができる。

高瀬川の庭



隣接する市営住宅の住民と大学の共通の **庭** である。図書館、大学食堂、カフェなどが修景された高瀬川に面している。市営住宅の住民にも開放される。図書館前には学生と教員によって選定された本を紹介する **お見世**、ブックカフェがある。**お見世** では学長とカフェトークを楽しむことができる。

鴨川河川敷とフローティングテラスそして“音楽の庭”がつながる



- ・鴨川に面する音楽カフェで音楽演奏を聞き、春はお花見を楽しむ。
- ・観光客や市民や学生は鴨川土手遊歩道から **フローティングテラス** や **音楽の庭** にアクセスする。
- ・地域の景観が、新しくできる大学と一体になる。



鴨川から大学を見る

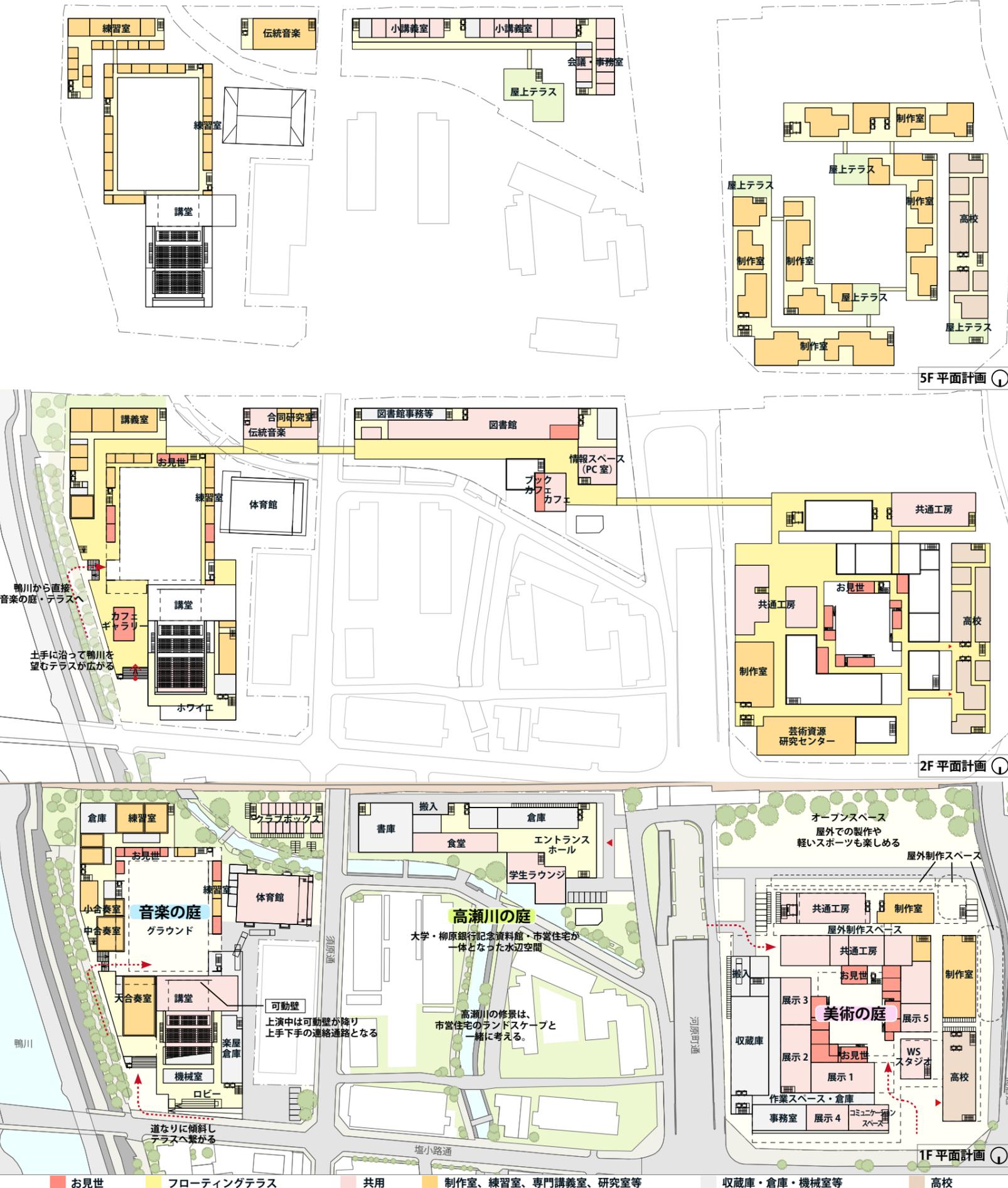
新たな京都の景観

京都の都市景観に沿った、水平を強調する庇のような屋根  
 繊細な細い柱の連なりで連子格子のようなファサード

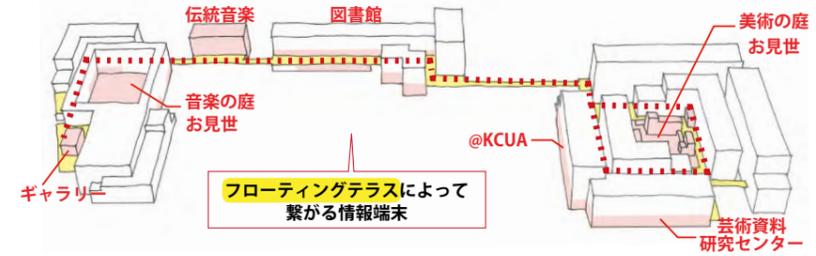
- ・塩小路側に対して出来るだけ高さを抑えた建築にする。京都の繊細な建築群の印象を壊さないようにする。
- ・一つの大きな建築ではなくて、いくつもの建物によって構成される小さな都市のような建築を心がける。市営住宅、高瀬川を含めてこの一体が京都の新しいシンボルゾーンになる。



平面計画



フローティングテラスによって繋がれたコーパスエリア



図書館やギャラリーやお見世などの情報端末は、**フローティングテラス**によって繋がっている。誰もが気軽に訪れ芸術情報に触れることができる。地域の文化資源や市民活動なども公開し、憩い学べる場をつくる。

京都の新たな拠点



- ・観光地となることで新たな動線をつくる。
- ・たくさんの人と芸術で一帯が賑わっていき、文化創造の拠点を築く。

開かれたキャンパスとセキュリティ計画の両立

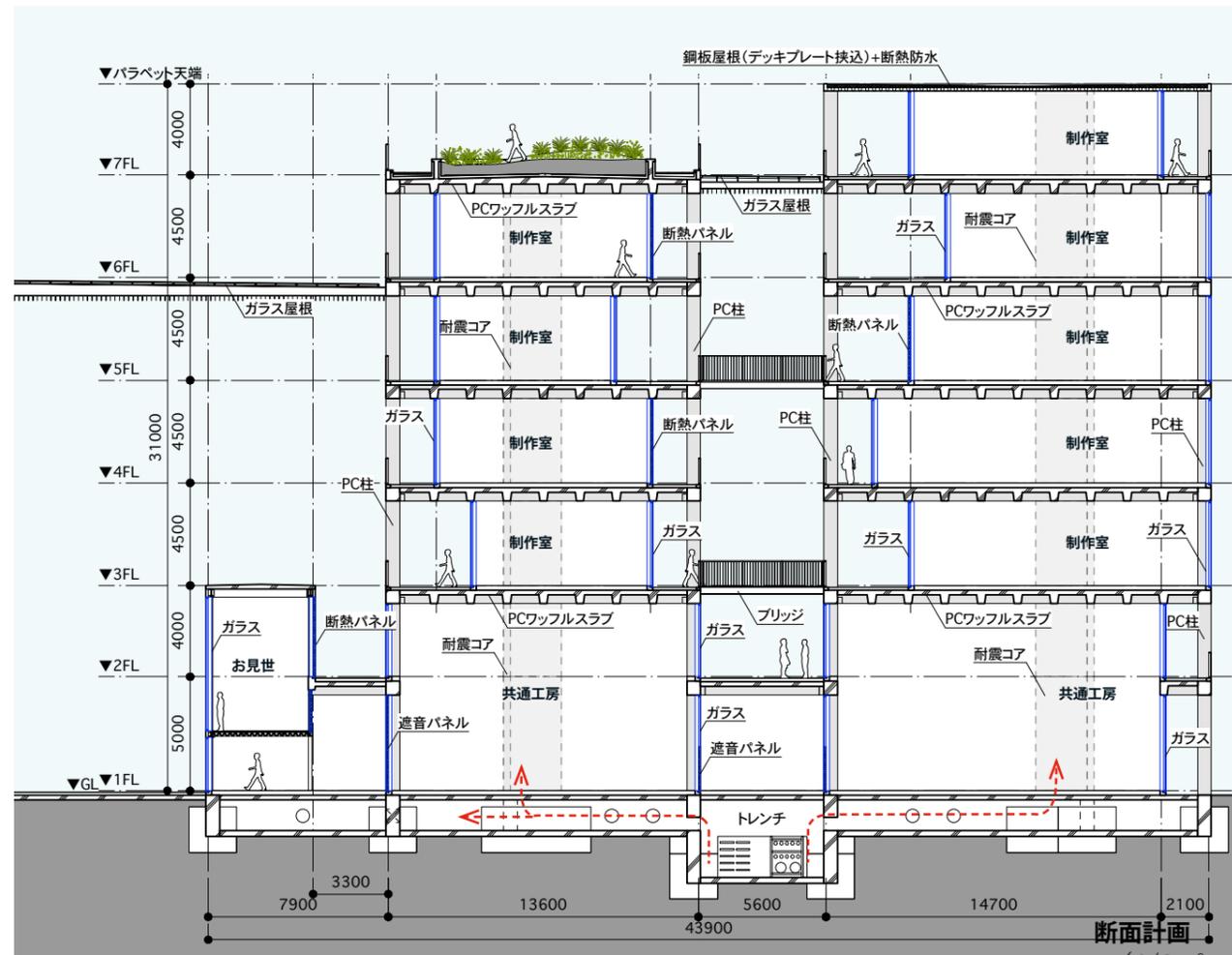


- ・日中は1階及びフローティングテラス全体が一般に開放される。夜間はセキュリティーゲートにより施錠される。
- ・ゲートで閉じられても3つの地区は**フローティングテラス**によって結ばれている。

更新・成長するフレキシブルなシステム

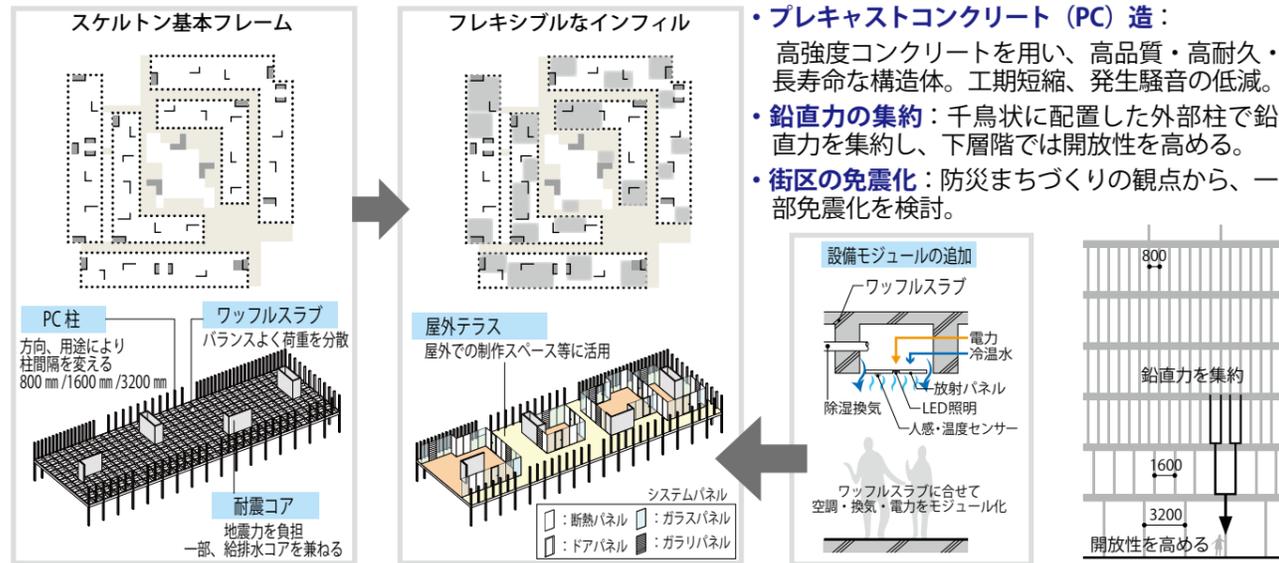
スケルトン…高耐久 PC による<ストラクチャー> インフィル…可変可能な<教室>

建築は<スケルトン/インフィル>の基本フレームで構成され、インフィルは使う人たちとの対話によって形成される。完成後も使い手に合わせながら、更新・成長させていくことができる。



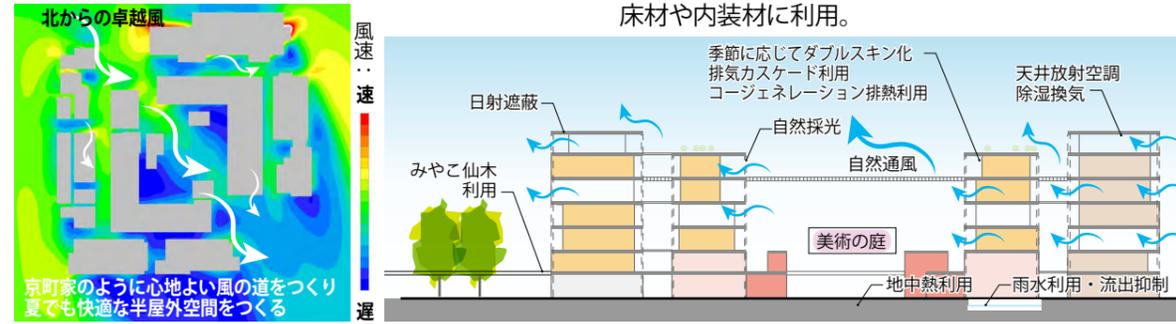
■ スケルトン (構造体) とインフィル (壁パネルシステム)

- ・**スケルトン**: プレキャスト・コンクリート (PC) による柱・梁・床と耐震コアによる構造体を採用する。
- ・**インフィル**: すべての校舎棟を同一のモジュールで構成。内外は数種類の壁パネルによって仕切られる。断熱パネル、透明ガラス、ガラリ等である。設備配管は天井ワッフルスラブに設置され、将来の変化に柔軟に対応することができる。
- ・**完成後も成長する**: 将来的な用途の変更に応じて更新・成長を続けることができる。



■ 環境システム

- ・**京町屋の知恵の応用**: 庭や半屋外空間を活かした自然通風・自然採光・日射遮蔽の工夫。
- ・**外皮の二重性**: PC柱間は必要に応じて開閉可能なガラスパネルを設置。季節に応じて内部化し、外皮の二重化が可能。
- ・**放射空調**: モジュール化された天井放射空調・除湿換気 (デシカント) による快適性と省エネの両立。



- ・**地中熱利用**: 地中熱を得やすい川近くという条件を活かし地中熱ヒートポンプにより冷暖房熱源として利用。補助率 2/3 の補助金の活用を検討。
- ・**屋外作業環境の向上**: 自然通風、室内排気熱カスケード利用、コージェネレーションの排熱利用ヒーターにより半屋外作業環境を向上。
- ・**地産材の活用**: 京都の「みやこ仙木」をテラスの床材や内装材に利用。

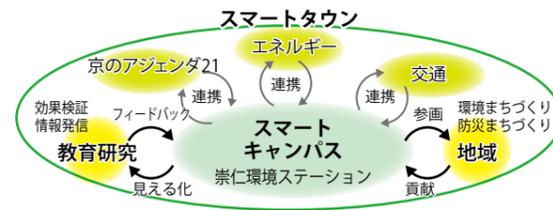
■ 大学とまちの新しい関係～崇仁環境まちづくりへ

- ・市営住宅・地域体育館・うるおい館と一体のキャンパスと捉える。崇仁のまちづくりにつなげる。
- ・3つの庭 (美術の庭・音楽の庭・高瀬川の庭) でキャンパスと地域の一体の活動の輪を広げる。
- ① 楽洛広場 (河原町通) でイベント・祭りの開催
- ② 音楽の庭 (元崇仁小学校グラウンド) での祭り
- ③ 柳原銀行資料館を大学図書館と一体化して運営
- ④ 船鉾・曳山の保存・展示スペースのオープン化
- ⑤ 新旧高瀬川の修景やピオトープの管理
- ⑥ 崇仁環境ステーションを設置
- ⑦ C地区オープンスペースの屋外展示場



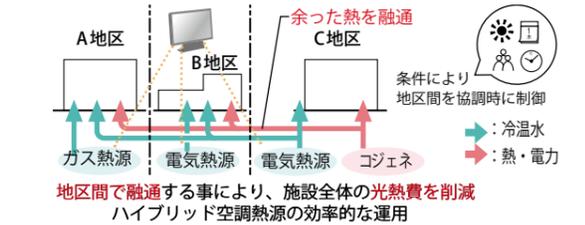
■ スマートタウン/キャンパスエネルギーマネジメント

- ・**コージェネレーションの設置**: コージェネレーションシステムによりキャンパス内で発電を行い、電力ピークカットを図る。発電による排熱を夏季はデシカント除湿の再生熱源、冬季は暖房熱源として効率的にエネルギーを運用。
- ・**3地区のエネルギー融通**: 崇仁環境ステーションでキャンパスのエネルギーを一元管理。上空通路を利用して3地区の熱融通を図る。将来、市営住宅への電力融通、ごみのコンポスト化・バイオ発電など自然エネルギーの共同管理へ。



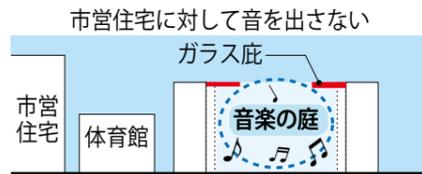
■ 防災まちづくり

- ・**災害時の拠点として**: 1階の**音楽の庭・美術の庭・高瀬川の庭**、2階の**フローティングテラス**は、キャンパスの避難階及び、地域の避難所・緊急避難場所・帰宅困難者受け入れ機能を持つ。
- ・**災害時の連携**: 下京地域体育館、塩小路消防出張所との連携を図る。
- ・**災害時のエネルギー源**: 非常用自家発電機を設置。コージェネレーション、空調熱源に中圧ガスを用いることで災害時のエネルギー源として活用。
- ・浸水が予測されるA地区を避けて災害備蓄倉庫、収蔵庫、資料館を計画。



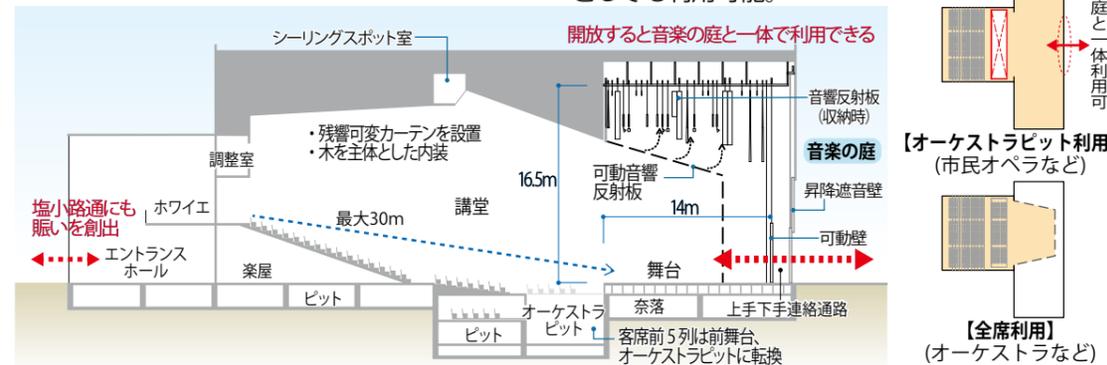
■ 防音計画

- ・**JR に対する防音**: JR 側に建物を配置することで、キャンパス内の静けさを確保する。線路側に面する窓は遮音性能の高い二重サッシとする。(JR の騒音については測定によりスペックを決定。)
- ・**周辺に対する音楽学部の配慮**: 練習室、**音楽の庭**から屋根のガラス庇、及び囲われた平面計画により周囲に騒音を出さない。講堂はJR線路から十分に距離を確保し (80 m程度) 配置。
- ・**周辺に対する美術学部の配慮**: 美術学部の工房は1階の周辺より地盤レベルの低い高倉通側に計画し、囲われた空間とすることで、近隣の市営住宅などの住環境に配慮。



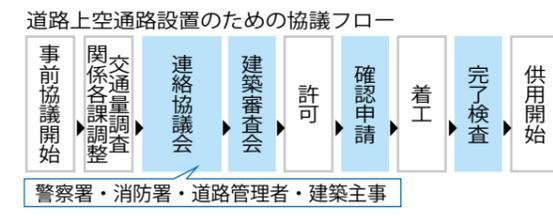
■ 音響計画

- ・現状の大学・高校の発生音源を測定し、周辺環境に配慮した防音スペックを定める。
- ・演奏室・練習室については、必要に応じて「ボックスインボックス」(浮床・浮壁・浮天井) を採用。
- ・温かな響きを得る為に優しい反射音が見られ、日本の伝統音楽上演にも適した「木」を主体とした内装とする。
- ・講堂は、室内楽に最適な音響条件を得るのに十分な天井高さとする。オペラ上演も可。
- ・残響可変カーテンを客席内に設置し、本番時と同じ音環境で練習できるように計画する。
- ・舞台の正面反射板は、音楽の庭との一体利用の時にも反射板兼背景として機能するよう計画。
- ・講堂と隣接する大合奏室は、リハーサル室や楽屋としても利用可能。



■ 道路上空通路の提案

- ・河原町通、須原通の上空に通路を架け、キャンパス3街区を結ぶことを提案。
- ・人 (学生・教職員・来訪者)、物 (作品・楽器など) の移動・情報・エネルギーの接続、及び災害時避難動線としても有効。
- ・河原町通、須原通の頻繁な横断による事故の防止と交通渋滞を低減する。
- ・**上空通路の有無に関わらず成立するよう**、3地区各々に機械室を設けるなど、設計や工程に影響が無いよう、スケジュール的にも切り離して進める。



■ 防災計画

- ・大臣認定を伴う避難安全検証法を用いず、将来的な改修や間仕切変更が容易な計画とする。
- ・**フローティングテラス**は外気に十分開放された安全性の高い避難経路とし、**美術の庭・音楽の庭**についても、開口部を十分に設け、避難に有効な屋外空間とする。
- ・テラスや廊下は、吹抜を介して屋外に面するため防火区画が不要な安全性の高い建物とする。

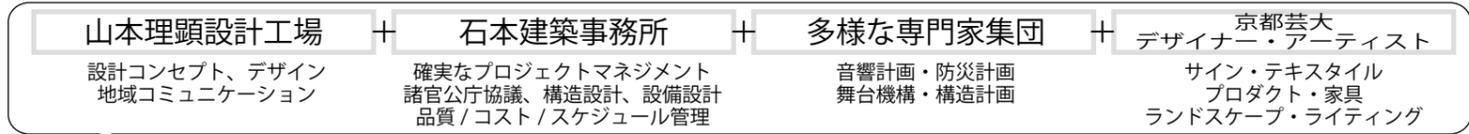
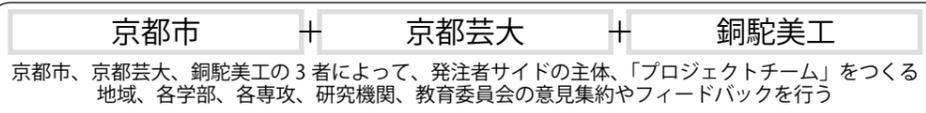
■ 排水処理計画

- ・京都芸大・銅蛇美工の各学科の使用材料を分析し (絵の具の顔料等に多く含まれている重金属など)、一般排水と分け専用流し台から排水処理施設へ排出。
- ・C街区南に特殊排水処理施設を設置。排水物をろ過し標準PPM以下にし一般雑排水と合流して排出。
- ・酸、アルカリ類等金属を溶かす腐蝕材などは、各学科に専用保管庫を設け、専門業者にて搬出。

対話を重視したワークショップ形式による設計

基本フレームと対話的设计手法

- 建築家が提示した柔軟な基本フレームに、対話的手法によって様々な色を加えていくことにより豊かなキャンパスを実現。



ヒアリングの進め方

- 基本設計期間中に芸大の各専攻、研究機関、銅駝美工に対し、3回ヒアリングを行い、段階的に使い手の意見・要望を吸上げ、設計に反映させる。
- 各専攻ヒアリングはアーキテクトチームから美術学部と音楽学部の担当を決め、2チームに分かれ効率的に意見収集を行う。

ヒアリングサイクルの例

	月	火	水	木	金
美術学部担当	油画	彫刻	版画	漆工	染織
音楽学部担当	作曲	指揮	ピアノ	管・打楽	声楽

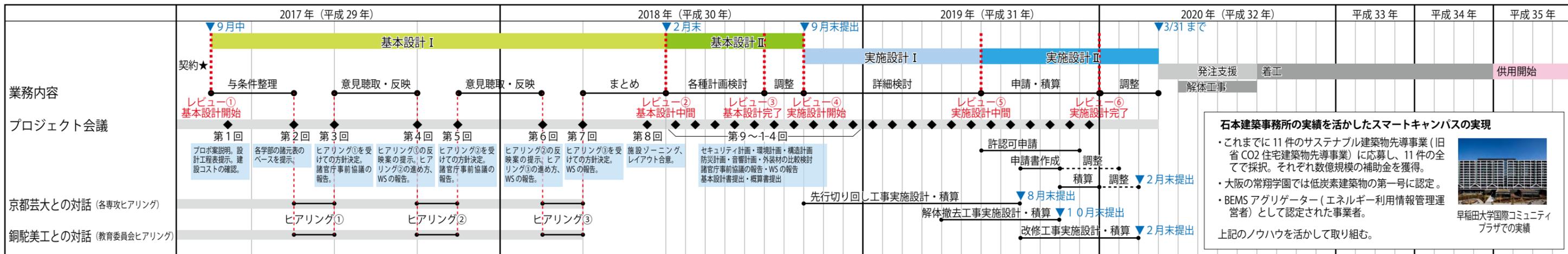
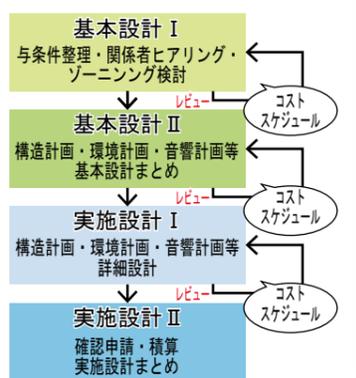
ワークショップの進め方

- ワークショップのコーディネーションは建築家自らが行う。
- アーキテクトチームに各ワークショップの担当を据える。



確実なプロジェクトマネジメント

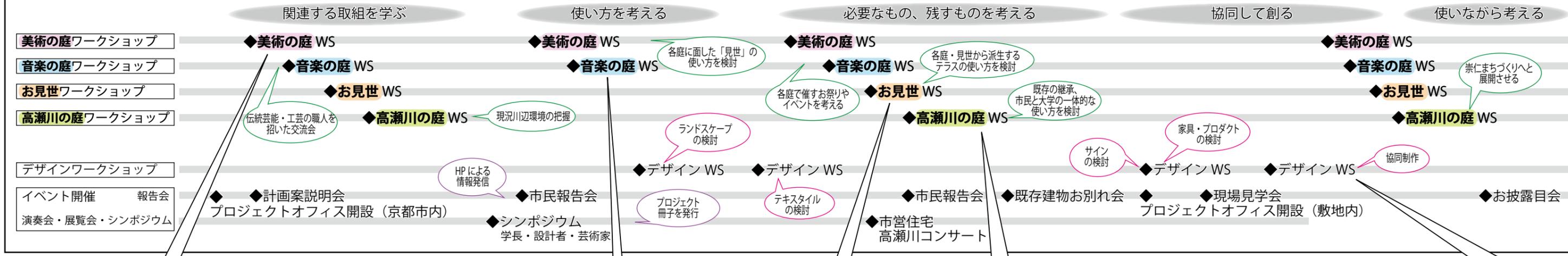
- 石本建築事務所のプロジェクトマネージャー及び技術グループにより、コスト、スケジュールを確実に推進する。
- 設計を4つのフェーズに分けて管理: 基本設計I、基本設計II、実施設計I、実施設計IIの4つのフェーズで管理する。
- 業務企画書: 業務開始時に、設計提案及び仕様書を基に品質・コスト・工程についての「業務企画書」を作成して実現性を検証する。
- 設計レビュー: プロジェクトの節目で技術グループが検閲を行い、設計内容にフィードバックする。設計レビューを繰り返し目標を達成する。



石本建築事務所の実績を活かしたスマートキャンパスの実現

- これまでに11件のサステナブル建築物先導事業(旧省CO2住宅建築物先導事業)に応募し、11件の全てで採択。それぞれ数億規模の補助金を獲得。
- 大阪の常翔学園では低炭素建築物の第一号に認定。
- BEMS アグリゲーター(エネルギー利用情報管理運営者)として認定された事業者。

上記のノウハウを活かして取り組む。

美術の庭ワークショップ

美術学部 × 銅駝美工 × 設計チーム

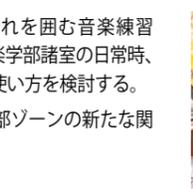
美術の庭とそれを囲むギャラリー @ KCUA や美術学部諸室の日常時、イベント時の使い方を検討。まちと美術学部ゾーンの新たな関係構築を図る。



音楽の庭ワークショップ

音楽学部 × 設計チーム

音楽の庭とそれを囲む音楽練習室・講堂・音楽学部諸室の日常時、イベント時の使い方を検討する。まちと音楽学部ゾーンの新たな関係構築を図る。



お見世ワークショップ

音楽学部 × 美術学部 × 銅駝美工 × 設計チーム

キャンパス1階の3つの庭、2階のフローティングテラスに展開するお見世の検討を通じて、新たな観光地としてのキャンパスの形成を図る。キャンパス開設後はお見世運営委員会へ発展。



高瀬川の庭ワークショップ

市宮住宅 × 京都芸大 × 設計チーム

隣接する市宮住宅と高瀬川周辺の環境をワークショップを通して考える。まちと大学の新しい関係を築く母体として、設計から竣工後を通じて開催し、崇仁まちづくりへとつなげる。



デザインワークショップ

美術学部 × 銅駝美工 × 設計チーム

京都芸大、銅駝美工の教授や卒業生を含むデザイナー・アーティストと協働で、キャンパス内の様々な要素をデザイン・実作する。

